SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

# A Researching Arnold Robel through Japanese Language : Teaching Materials “The Letter”



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-12-24<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 大塚, 浩<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.14945/00026953 |

# アーノルド・ローベル国語教材研究論

## ――「お手紙」の考察を中心に――

A Researching Arnold Robel through Japanese Language
Teaching Materials “The Letter”

大塚　　浩[1]
Hiroshi OHTSUKA

（令和元年 12 月 2 日受理）

**ABSTRACT**

Arnold Lobel (1933-1987) was born in Los Angels,Republic of United States of America. The first recorded example of his work “The Letter” ran in 1970 edition of Publishers by Harper & Row.

Later, in 1970, he had his first work, “The Letter” officially published. A fuller, revised version “The Letter” was included.

The textbook version of “The Letter” was published by Kyouiku Publication and Mitsumura Publication in 1980. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 7 years or older and aged 8 years or older. Since 1980, the textbook has been reprinted number of times.

The main issues examined in the research of Arnold Lobel, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of “The Letter” and those in the school textbook version.

### はじめに

アーノルド・ローベル（**1933-1987**）は、現代アメリカを代表する絵本作家であり、代表作として『グレッグのけんび鏡』、『ごそごそねずみのマーサ』等がある。日本語訳本としては、『どろんここぶた』、『ふくろうくん』、『きりぎりすくん』等が翻訳絵本として広く人々に親しまれ、愛読されている。

小学校国語教科書教材としての「お手紙」は、昭和 **55** 年度版の教育出版（小学校第 **1** 年用・下）並びに光村図書（小学校第 **2** 学年用・下）を緒として、以後長年掲載され続けている。日本書籍には、平成 **4** 年度版から平成 **16** 年度版まで小学校第 **2** 学年用・上に掲載され、大阪書籍では、平成 **12** 年度版から平成 **22** 年度版まで小学校第 **2** 学年用・上に掲載されている。また

[1] 国語教育系列

学校図書には、平成 17 年度版から小学校第 2 学年用・上に掲載され、東京書籍並びに三省堂では、平成 23 年度版から小学校第 2 学年用・上に掲載されている。

アーノルド・ローベルの「お手紙」については、拙稿「小学校国語教科書教材基礎研究―「お手紙」の考察を通して―」において、作家アーノルド・ローベルと訳者三木卓、作品中における「お手紙」の機能と意義、がま君とかえる君の悲しみ、について考察を行ってきている。

そこで本稿では、「アーノルド・ローベル国語教材研究論」の一環として、「お手紙」の考察を通し、かたつむり君という存在、かえる君の葛藤、何故かえる君は手紙を書いたことをがま君に伝えたのか、について考察を進めていくものとする。

## Ⅰ. かたつむり君という存在

### (1)かたつむり君の役割

作品「お手紙」における登場人物として、かえる君、がまがえる君に加え、かたつむり君の存在を忘れることはできない。かたつむり君は、作品において脇役であるが、非常に個性的で存在感のある登場人物である。

作品「お手紙」では、手紙を書き終えて自宅を出るかえる君とかたつむり君が出会う場面について、次のように記されている。1)

かえるくんは、家からとび出しました。

知り合いのかたつむりくんに会いました。

「かたつむりくん。」

かえるくんが言いました。

「おねがいだけど、この手紙をがまくんの家へもっていって、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」

「まかせてくれよ。」

かたつむりくんが言いました。

「すぐやるぜ。」

それから、かえるくんは、がまくんの家へもどりました。

朝比奈昭元は、作品「お手紙」に登場するかたつむり君の性格について、次のように述べている。2)

かたつむりくんもかたつむりくんである。結果的に彼の足で四日もかかる郵便物を、二つ返事で引き受けたのである。「まかせてくれよ・すぐやるぜ」といって引き受けるかたつむりくんの意気込みや思いから彼もまた気のいい・おおらかな人物のようである。そんなかたつむりくんの実直さを知っていたこともあって、安心して大事な手紙を頼んだのかも知れない。

朝比奈は、「彼の足で四日もかかる郵便物を、二つ返事で引き受けた」かたつむり君を、「気のいい・おおらかな人物」として捉えている。かえる君は、そのようなかたつむり君の「実直さを知っていたこともあって、安心して大事な手紙を頼んだ」のであろうと推察している。

しかしながら、かたつむり君は「二つ返事で引き受けたのである」という、朝比奈の指摘には異を唱えたい。「二つ返事」という言語表現は、内容を深く確かめずに、はいはいとすぐさま返事をする意を表しており、かたつむり君が、かえる君に頼まれた仕事を気楽に引き受けてしまったという印象を拭えない。

ここで、かたつむり君の様子に目を向けたい。かたつむり君は、かえる君から「この手紙をがまくんの家へもっていって、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」と手紙の届け先+届け場所を指定された後に、「まかせてくれよ。」と同意の返答をしている。その上で、「すぐやるぜ。」と発言し、かえる君から依頼された仕事に直ぐさま着手しているのである。

その後かたつむり君は、四日間という時間を要してがま君の家に到着し、何の衒いもなく堂々と手紙をがま君に届けている。つまり、四日間でがま君の家に到着することは、かたつむり君にとって「すぐやる」ことに包含される速度と時間であったのではなかろうか。

このように、かえる君とかたつむり君の間には、速度と時間に対する認識の相違が存在していたと言える。かたつむり君の発言や行動様態から判断すると、かたつむり君は、四日間という時間を掛け全力で歩を前へ進めることにより、かえる君から依頼された仕事を全うしたと考えることができよう。

跡上史郎は、作品中におけるかたつむり君について、次のように述べている。**3)**

> かえるくんは、かたつむりくんにお手がみを託して、「がまくんのいえへもど」るが、原文では **ran back** だから、急いで走って戻ったのである。もちろん、かたつむりくんより速やかにがまくんの家へ着くためだが、もし要件を伝えるための手がみならば、自分で持っていっても、あるいは、そのまま自宅にいてもよかったはずである。かえるくんは、第三者によってお手がみががまくんのゆうびんうけに入れられ、それをがまくんが手に入れるという、社会の仕組みとしてもお手がみをがまくんへの贈り物としたのだということが、ここでもわかる。

跡上は、「もし要件を伝えるための手がみならば、自分で持っていっても、あるいは、そのまま自宅にいてもよかったはずである。かえるくんは、第三者によってお手がみががまくんのゆうびんうけに入れられ、それをがまくんが手に入れるという、社会の仕組みとしてもお手がみをがまくんへの贈り物としたのだ」と主張している。かたつむり君は、かえる君が認（したた）めた手紙を運んでくれる「第三者」としての役割を担っていたと言える。

かえる君は、かたつむり君に対し「おねがいだけど、この手紙をがまくんの家へもっていって、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」と伝え、届け先をがま君の家の「ゆうびんうけ」に特定している点に着目したい。ただ単に手紙を「がまくんに届けてくれないかい。」と依頼したのではなく、手紙をがま君の家にある「ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」と、届け場所を明確に指定している。かえる君は、かたつむり君に単なる「運搬人」ではなく、「郵便配達人」としての仕事を依頼しているのである。

かえる君は、「大いそぎで」自宅に帰り手紙を書いた後、家から「とび出」すほど先を急いでいた。かえる君は、急ぎながらも第三者として手紙を託せる相手を探していたと考えることができる。そのまま書き手のかえる君自身が、がま君の家に手紙を持参するのであれば、自宅を出るなり一直線にがま君宅へ走っても良かったはずである。かえる君は、誰かに手紙を託そうと周りに目を向けながら、がま君の家へ戻ろうとしていたではないかと考えられる。

**(2) かたつむり君でなければいけなかったのか**

西郷竹彦は、かたつむり君の存在について、次のように述べている。**4)**

> では、なぜユーモアをふまえた読みの方がいいのでしょうか。例えば、かえるくんが、かたつむりくんに手紙を頼むところを考えてみましょう。ここでおもしろいのは、足の遅いかたつむりくんにたのんだということと、かたつむりくんが「すぐやるぜ。」といったところ

です。もちろんそのまま読めば、ただおもしろいねということで終わってしまうのですが、なぜ足の遅いかたつむりくんにたのんだのかを考えることにより、その意味するものは、もっと深くなります。つまり、とにかく急いで手紙を渡したい。だれでもよかったのです。とにかく、すぐに。それしか考えていなかった。だからこそ、読者から考えればおかしいと思うことを、いっしょうけんめい、まじめにやるのです。かたつむりくんだってそうです。四日はたったけれども、彼も友だちからまかされた仕事をいっしょうけんめいやったのです。そのまじめさとおかしさの差が、かえって一層、そのまじめさ、友情の本質を強調することになるからです。

西郷は、手紙を届けることを依頼する相手について「とにかく急いで手紙を渡したい。だれでもよかったのです。とにかく、すぐに。それしか考えていなかった。」として、手紙を届けることを依頼する相手は、「だれでもよかった」と主張している。この西郷の意見には、疑問が残る。かえる君は、自分宛の手紙を貰ったことがないことで悩み、意気消沈しているがまくんに対し、懸命に手紙を書いたのである。そうした重要な手紙を託す相手が、「だれでもよかった」とは考え難い。

その一方、永井たつ代は、作品中の「知り合いの」という言葉に着目し、次のように述べている。**5)**

また、かえるくんが急ぎの手紙を動きの遅いかたつむりくんにたのんだことが、この物語のおもしろさのもとになっている。しかし、かえるくんは急ぐあまりに何も考えずに、かたつむりくんに手紙を頼んだとは思われない。「知り合いのかたつむりくん」という言葉から「知り合い」だからこそ、親友がまくん宛の大事な手紙を託す気持ちになったのである。もちろん、あれほど遅いかたつむりくんであることは、考えていなかったのであろうが。

ここで永井は、本文の「知り合いのかたつむりくん」という言葉に注目し、かえる君とかたつむり君が「知り合い」であるからこそ、「親友がまくん宛の大事な手紙を託す気持ちになった」と述べている。かえる君は、がま君へのお手紙を依頼する相手を意識的に選んでいたのではなかろうか。かえる君は、がま君への手紙を託す相手を、第三者であれば誰でも良いと思っていた訳では決してなかったと考える。

かえる君は、手紙を書き終えて自宅を「とび出」し、がま君の家へ向かう途中、手紙の配達人を依頼しようと知っている顔を探している内に、かたつむり君を見つけて駆け寄ったのかも知れない。かたつむり君は、責任感の強い人物であり、大事な手紙を託するに相応しい人物として適任であると白羽の矢を立てたのではなかろうか。かたつむり君は、かえる君の頼み事を受け入れ、「まかせてくれよ。」「すぐやるぜ。」と快諾してくれる人柄であったことは確かであろう。

結果的にかえる君とがま君は、四日間もの長い間、ずっとかたつむり君の到着を待ち続けることになる。かえる君は、あのかたつむり君であれば、必ず手紙を届けてくれるに相違ないと信頼を寄せていたのである。かえる君とがま君の二人は、かたつむり君の誠実さや真面目さを承知していたからこそ、諦めることなく四日間もの長い間、待ち続けることができたと考えるのである。

## Ⅱ．かえる君の葛藤

### (1) かえる君の投げ掛け

かえる君は、かたつむり君に手紙を託した後、急いでがま君の家に戻る。そして、昼寝をしているがま君に対し、手紙が届くのをもう少し待ってみるよう説得を始める。作品「お手紙」では、この場面について次のように記されている。**6)**

それから、かえるくんは、がまくんの家へもどりました。

がまくんは、ベッドでお昼ねをしていました。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きみ、おきてさ、お手紙が来るのを、もうちょっとまってみたらいいと思うな。」

「いやだよ。」

がまくんが言いました。

「ぼく、もう、まっているのあきあきしたよ。」

かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。かたつむりくんはまだやってきません。

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「ひょっとして、だれかがきみに手紙をくれるかもしれないだろう。」

「そんなこと、あるものかい。」

がまくんが言いました。

「ぼくに手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」

かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。

「でもね、がまくん。」

かえるくんが言いました。

「きょうは、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。」

「ばからしいこと言うなよ。」

がまくんが言いました。

「今まで、だれもお手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」

かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。

西郷は、自宅で手紙を書いた後、再びがま君の家に戻ったかえる君について、次のように述べている。**7)**

かえるくんのせりふに注目してみましょう。＜もうちょっとまってみたらいいと思うな。＞＜ひょっとして、だれかがきみに手紙をくれるかもしれないだろう。＞＜きょうは、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。＞――回二回三回と回を重ねるごとに、かえるくんの手紙を待つことを勧めがまくんを励ますことばは、より確信に満ちた強いことばに変化します。

西郷は、かえる君の「＜もうちょっとまってみたらいいと思うな。＞＜ひょっとして、だれかがきみに手紙をくれるかもしれないだろう。＞＜きょうは、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。＞」という三度の発言を取り上げ、次第次第に「より確信に満ちた強いことばに変化」していると指摘している。

ここでは、かえる君からベッドで横たわるがま君に投げ掛けられた三度の発言について考察を進めたい。かえる君からがま君に対する一度目の「きみ、おきてさ、お手紙が来るのを、もうちょっとまってみたらいいと思うな。」という発言では、「お手紙が来る」という言語使用を

している。文章の主語が「お手紙」になっているため、恰も「お手紙」が自分からやって来るかのような表現である。さらにかえる君は、「もうちょっと」と時間を限定している。この「もうちょっと」は、まさにあとほんの少しの間の意を示すものである。これに対しがま君は、「いやだよ。」と強く拒絶する。更にがま君は、「ぼく、もう、まっているのあきあきしたよ。」と発言し、到着する当てのない手紙を待ち続けることに「あきあき」したと弱音を吐いている。

次に、かえる君からがま君に対する二度目の発言である「ひょっとして、だれかがきみに手紙をくれるかもしれないだろう。」では、「ひょっとして」という言語使用をしている。かえる君のこの「ひょっとして」という言葉は、手紙を待つことに飽き飽きしているがま君に対して、諦めずに手紙の到着を待っていて欲しいという願いが込められていると考える。この発言では、文章の主語が「だれか」となり、匿名ながらも手紙の差出人の存在を暗示させている。ここに、自分自身ががま君宛に手紙を出したことを密かにしながら、「だれか」という主語を前面に出し、気乗りしないがま君に何とかして手紙の到着を待たせようと苦慮するかえる君の姿を看取することができよう。

かえる君からがま君に対する三度目の発言である「きょうは、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。」では、前回の「ひょっとして」から「きょうは」への言い換えが行われている。かえる君が発した「きょうは」という日付けの特定は、今までの日常とは異なる今日という日の特別性を示唆する重要な言語表現であると考える。また、かえる君の発言の文末表現が、前回の「かもしれないだろう」から「しれないよ」へと変化しており、お手紙の到着を予見する確度を上げた言語表現となっている点にも着眼したい。

**⑵かえる君の行動**

かえる君は、ベッドで横になるがま君に対する三度の発言をしながら、部屋の窓から次のような行動を反復している。

**1)**かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。かたつむりくんは、まだやってきません。
**2)**かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。
**3)**かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。

ここでは、この繰り返されるかえる君の行動について考察を進めていく。橘優子と松川利幸は、かえる君の胸の内について、次のように述べている。**8)**

> この物語のおもしろさのもとは、かえるくんがあしのおそいかたつむりくんに、お手紙を頼んだことである。そのお手紙を待ちこがれているかえるくんのいら立ちは、単にお手紙が届くのがおそいせいだけではない。必ずお手紙が届くことを知っているかえるくんが、それを知らないがまくんに、なんとかわからせようとするが、どうしてもわかってもらえないもどかしさがある。それが、二人の会話や行動を通して対照的に描かれている。ここにこの物語の妙味がある。二回、三回と、まどからゆうびん受けをのぞきこむかえるくんのすがたが、それを象徴している。

橘と松川は、手紙の到着を待ち焦がれるかえる君の苛立ちは、「単にお手紙が届くのがおそいせい」だけではなく、「必ずお手紙が届くことを知っているかえるくんが、それを知らないがまくんに、なんとかわからせようとするが、どうしてもわかってもらえないもどかしさ」にあると考えている。

吉田勉は、かえる君の心情の変化について、次のように述べている。**9)**

> ＜がまくん＞にお手紙を待つように働きかけ、＜かたつむりくん＞の到着をいまかいまか

と思いながら窓の外を見る＜かえるくん＞の言動が、心情の変化を伴いながら、くり返され（類比）ています。手を変え、品を変え、＜がまくん＞にお手紙を待たせようとする。＜かえるくん＞のやさしさがふくらまされ、強調されています。　（　中　　略　）

場面(二)から場面(三)の前半では、＜かえるくん＞の言動から手紙を待つ喜びを何とかして＜がまくん＞に味あわせてやりたいというかえるくんの思いが読みとれます。しかし、そういう＜かえるくん＞の思いにもかかわらず、いくらすすめてもあきらめきって待とうとしない＜がまくん＞に対するいら立ちのようなものが、＜かえるくん＞の言動と対比することでとらえられます。つまり、＜かえるくん＞の行動・思いの＜順序＞をたどっていけば、＜がまくん＞に告白する＜かえるくん＞に共感できるわけです。

吉田は、この場面を「＜がまくん＞にお手紙を待つように働きかけ、＜かたつむりくん＞の到着をいまかいまかと思いながら窓の外を見る＜かえるくん＞の言動が、心情の変化を伴いながら、くり返され（類比）てい」ると把捉している。更に、こうしたかえる君の言動からは、「手紙を待つ喜びを何とかして＜がまくん＞に味あわせてやりたいというかえるくんの思いが読みとれ」ると主張する。

これに対し、西郷はこの反復表現について、次のように述べている。**10)**

一回目は、＜かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。＞です。しかし、二回目、三回目は、＜かえるくんは、まどからのぞきました。＞となっています。かえるくんの手紙を待つじれったい気持ちの高まりが感じられます。この作品の特徴は、このような反復にあります。その反復は、ただ反復されるのではなく、かえるくんとがまくんの会話の対比を際立たせながら、変化を伴って発展する反復です。読者は、実におもしろくこの作品を読めるし、「かえるくんのがまくんへの思いやり」を一層強く印象づけられるのです。

西郷は、かえる君の動作である「かえるくんは、まどからゆうびんうけを見ました。」から「かえるくんは、まどからのぞきました。」への変化に注目し、ここに「かえるくんの手紙を待つじれったい気持ちの高まりが感じられ」ると捉えている。そして、かえる君とがま君との「会話の対比を際立たせながら、変化を伴って発展する反復」から「かえるくんのがまくんへの思いやり」が感じられると述べている。

**(3)がま君の返答**

かえる君が手紙を書き終えてがま君の家へ戻った時、がま君はベッドで昼寝をしていた。ここでは、かえる君の言葉掛けに対するがま君の返答を中心に考察を進めていきたい。

西郷は、がま君の反応について、次のように述べている。**11)**

がま君はどうでしょう。＜もう、まっているのあきあきしたよ。＞＜そんなこと、あるものかい＞＜…いるとは思えないよ。＞＜…きょうだって同じだろうよ。＞―手紙がくることを否定する気持ちは、ますます深まり失望感は深くなっていきます。

西郷は、がま君の「＜もう、まっているのあきあきしたよ。＞＜そんなこと、あるものかい。＞＜…いるとは思えないよ。＞＜…きょうだって同じだろうよ。＞」という返答を取り上げ、「手紙がくることを否定する気持ちは、ますます深まり失望感は深くなって」いると指摘している。

これに対して跡上は、がま君の言葉に隠された胸の内について、次のように述べている。**12)**

かえるくんが、かたつむりくんにお手がみを託した後も、「ぼくに手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」というがまくんだが、本当にあきらめてしまっているわけではない。

本当に誰もくれないと思っているのなら、そもそもこんなにふてくされているわけはなく、来なくて当然と澄ましていなければならないはずである。がまくんは、ベッドでふて寝しながらも、満たされることのない希望を抱き続けているのだ。その思いは、弱まるどころか、とても強いままなのである。

ここで跡上は、「『ぼくに手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。』というがまくんだが、本当にあきらめてしまっているわけではない」と考えている。更に、「本当に誰もくれないと思っているのなら、そもそもこんなにふてくされているわけはなく、来なくて当然と澄ましていなければならないはずである。がまくんは、ベッドでふて寝しながらも、満たされることのない希望を抱き続けているのだ。その思いは、弱まるどころか、とても強いままなのである」と主張している。

がま君は、作品の冒頭部で、かえる君から悲しそうに座っている理由を尋ねられ、「今、一日のうちのかなしいときなんだ。つまり、お手紙を待つ時間なんだ。そうなると、いつもぼく、とてもふしあわせな気もちになるんだ。」と答えている。がま君が悲しい気分で手紙を待っているのは、今日が初めてではないことが分かる。がま君は昼寝をしながらも、手紙が来ることを心底から諦めてはいなかったのではなかろうか。

高島晴美は、がま君の心持ちについて、次のように述べている。**13)**

このお話の表現上の特徴でもある繰り返しがここでも使われている。かえるくんとは対照的に、がまくんは「いやだよ。」「そんなことあるものかい。」「あきあきしたよ。」「ばからしいこと言うなよ。」「きょうだって同じだろうよ。」とますます心を閉ざしていく。かえるくんの気持ちを代表する「ひょっとして」に対して、がまくんの気持ちは、「ばからしいこと言うなよ」に代表される。何とか気もちを引き立てたいと思うかえるくんに甘えるがまくんの姿を見ることができる。

高島は、かえる君とがま君の会話の中に「何とか気もちを引き立てたいと思うかえるくんに甘えるがまくんの姿を見ることができる」と主張している。手紙を待つことを諦めていないがま君が、本心とは裏腹な言葉を口にしている場面は、自分自身を心配してくれているかえる君に対する本音の吐露であるとも言えよう。

がま君は、かえる君に質問された悲しい理由を「とてもふしあわせな気もちになるんだもの。」「だれもぼくにお手紙なんかくれたことがないんだ。毎日、ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。手紙をまっているときがかなしいのは、そのためなのさ。」と答え、自分自身の弱みとも取れる部面を、かえる君には素直に打ち明けている。それ程がま君は、かえる君のことを信頼していたと考えられる。そうしたかえる君に対しがま君は、この場面で平静とは全く異なる斜に構えた姿を見せている。しかしながら、がま君のこの変化は、かえる君との信頼関係が基盤にあるからこそ見せた、心配してくれているかえる君への本音の表出と看取することもできる。

## Ⅲ．何故かえる君は、手紙を書いたことをがま君に伝えたのか

### （1）かえる君の発言

ここでは、何故かえる君は、自身ががま君に手紙を書いたことを、到着前にがま君に伝えたのかについて考察を進めていきたい。作品「お手紙」では、この場面について次のように記している。**14)**

かえるくんは、まどからのぞきました。かたつむりくんは、まだやってきません。

「かえるくん、どうしてきみ、ずっとまどの外を見ているの。」
がまくんがたずねました。
「だって、今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」
かえるくんが言いました。
「でも来やしないよ。」
がまくんが言いました。
「きっと来るよ。」
かえるくんが言いました。
「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」
「きみが。」
がまくんが言いました。

井上敏夫は、この場面について次のように述べている。**15)**

　このへんの、弱気のがまくんに対して、どこまでも強気で押しているかえるくんの、自信に満ちた言い方のおもしろさ、読み手はなぜかえるくんがあんな強気なのか知っているけれども、がまくんにはわからない。いつそれがわかるだろうかと思って読んでいく楽しさ。ところが、かえるくんの言葉、「きっと来るよ。」ここのところでかえるくんが、「だって、ぼくがきみにお手紙出したんだもの。」と、つい口をすべらせてしまうでしょう。　（中　略）

　かえるくんが、だんだんとがまくんの気持ちに吸い寄せられるようになって、つい口をすべらせてしまう。

井上は、「弱気のがまくんに対して、どこまでも強気で押しているかえるくんの、自信に満ちた言い方のおもしろさ、読み手はなぜかえるくんがあんな強気なのか知っているけれども、がまくんにはわからない」とし、かえる君とがま君の遣り取りについて言及している。また、かえる君が手紙を書いたことをがま君に打ち明ける場面については、「だんだんとがまくんの気持ちに吸い寄せられるようになって、つい口をすべらせてしま」ったと指摘している。

ここで、かえる君の様子に着目したい。かえる君は、何度試みても一向にがま君を励ますことができない状態にあり、もう一方の頼みの綱であるかたつむり君の到着の見込みも、全く立たない状態にある。かえる君の心の中には、焦りや不安が少しずつ生じてきていることが窺い知れる。しかしながら、幾ら焦りや不安が擡げてきていたとしても、これまで秘密にし続けてきているがま君に手紙を書いたことを、かえる君がついうっかり口を滑らせてしまうとは考え難い。

斎藤美加は、かえる君の発言について、次のように述べている。**16)**

　かえるくんが手紙のことを言わないでいれば、手紙がついた時にもっとドラマティックな喜びが生まれたはずです。でも、がまくんに信じてもらいたい、今安心させて、自分もホットしたいという思いでいっぱいのかえるくんは、話してしまう。それがとんちんかんな行動となってユーモアを生み出しているわけです。

斎藤は、かえる君ががま君に「手紙のことを言わないでいれば、手紙がついた時にもっとドラマティックな喜びが生まれたはず」であるが、「がまくんに信じてもらいたい、今安心させて、自分もホットしたいという思いでいっぱいのかえるくんは、話してしまう」と読み取っている。がま君には本当に手紙が届くことを「信じてもらいたい」、「今安心させたい」という思いがかえる君の意識の中に存在したことは確かであろう。しかし、「自分もホットしたい」と

いう思いがかえる君の中に存在したか否かは疑問である。

**⑵がま君の問いかけ**

ここでは、がま君の問いかけである「かえるくん、どうしてきみ、ずっとまどの外を見ているの。」について、考察を進めていきたい。なぜなら、このがま君の問いかけが、かえる君の心境にどのような影響を与えたのかを明らかにしたいからである。

西郷は、がま君の問いかけについて、次のように述べている。**17)**

また、<かえるくんは、まどからのぞきました。／かたつむりくんはまだやってきません。／「かえるくん、どうして、きみ、ずっとまどの外を見ているの。」>がまくんにしてみると、何でよその家に来て、家のそとばかり見ているのだ。人と話しているのに、と思ったのでしょう。こう言われるとかえるくんにしても答えざるをえません。答えざるをえないものだから、ついつい本音を言ってしまいます。<だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。> （ 中 略 ） かえるくんにしてみれば、ここまでくると、何で<きっと来るよ>と断言できるのか。その根拠を示さないわけにはいかなくなってしまいます。<だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの>とわけを言わざるをえないのです。ここで本音を吐いてしまったわけです。こういうのを「問うに落ちず語るに落ちる」というのです。つい本音を吐いてしまったということです。

西郷は、がま君から「かえるくん、どうして、きみ、ずっとまどの外を見ているの。」と問いかけられると、かえる君は「答えざるをえません。答えざるをえないものだから、ついつい本音を言ってしまいます。<だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだもの。>」と答えざるを得なかったと述べている。更に、「何で<きっと来るよ>と断言できるのか。その根拠を示さないわけにはいかなくなってしまいます。<だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの>とわけを言わざるをえないのです。ここで本音を吐いてしまった」と指摘している。

確かに、がま君の問いかけは、かえる君にとって大きな契機となったことは事実であろうが、ただそれだけに起因したとは言い難い。かえる君は、がま君の繰り返される悲観的な言葉の裏側に秘められた、手紙に対する強い思いに気付いていたと考える。何とか自分が手紙をがま君に出したことを明らかにせずに、がま君に必ず手紙が届くことを伝えようと呻吟するかえる君の姿を垣間見ることができる。

甲斐は、がまくんの問いかけについて、次のように述べている。**18)**

これまでの本文で言えば、まず相手への呼びかけ「かえるくん。」があって、地の文「がまくんがたずねました。」がそれに続く。この地の文は、発話解説表現で、前の発話を受けるとともに、続く発話を導入する役割を持っている。そして、その後半の発話が具体的な内容になる。こういう形式がずっと続いていたのに、本文 **22** で突然に、その形式をくずした発話が行われている。そのことを解釈すると、がまくんは、これまでも気になってしかたがなかったことを、抑えきれずに、ベッドから体を起こしてとうとう尋ねたということになる。

ここで甲斐は、作品中における呼びかけと地の文との関係性について言及している。つまり、「まず相手への呼びかけ『かえるくん。』があって、地の文『がまくんがたずねました。』がそれに続く。この地の文は、発話解説表現で、前の発話を受けるとともに、続く発話を導入する役割を持っている。そして、その後半の発話が具体的な内容になる」と説明している。

がま君が、作品の中で「かえるくん」と自分から呼びかけているのは、このがま君の問いかけ一文のみである。その他は、全てかえる君からの問いかけに答えているだけである。このが

ま君自らによる「かえるくん」という呼びかけの持つ特殊性と重要性について、国語教室においてじっくりと考える場面が存在しても良いと考える。

がま君の「かえるくん、どうしてきみ、ずっとまどの外を見ているの。」という問いかけは、かえる君の行動に対し、如何に敏感に興味・関心を示していたかを物語っている。また、「ずっと」「見ている（の）」という時間の経過を示す言語表現からは、がま君がかえる君の様子を断続的に気に止めていたことが分かる。

**（3）「でも来やしないよ。」**

甲斐は、がま君の発言「でも来やしないよ。」について、次のように述べている。**19)**

この作品に「だって」は三回使われている。一回目は **4** のがまくんの会話「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの。」で、ここは二回目の出現。かえるくんが、自分の確かに信じるところを、きちんと述べる表現に使っている。流れを変える大切な発話と言うことができる。特にここでは「今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」というように目的や対象を表す役割の「を」がきちんと使われている。お手紙の来ることを確信していることがこの「を」に表現されているのである。

なお、この **23** で、「かえるくんのお手紙をまつ」というように、お話の流れが変わってきている。その結果、逆にがまくんがなだめ役をつとめることになる。前の **23** で、会話の流れが変わり、それまではかえるくんがお手紙をまつと言い、がまくんが「でも来やしないよ。」と言い合う関係に変化している。

ここのがまくんの言葉の「でも来やしないよ。」は、それまでの乱暴な言葉づかいから、急にやさしい言い方に変化している。がまくんは、お手紙を待ち続けて、自分と同じようにかえるくんも悲しむのではないかと心配しているのである。

甲斐は、「がまくんの言葉の『でも来やしないよ。』は、それまでの乱暴な言葉づかいから、急にやさしい言い方に変化している。がまくんは、お手紙を待ち続けて、自分と同じようにかえるくんも悲しむのではないかと心配している」と主張している。

ここで、がま君との掛け合いの会話における、かえる君の発言を整理してみたい。

**1)**「きみ、おきてさ、お手紙が来るのを、もうちょっとまってみたらいいと思うな。」
**2)**「ひょっとして、だれかがきみに手紙をくれるかもしれないだろう。」
**3)**「きょうは、だれかがきみにお手紙くれるかもしれないよ。」
**4)**「だって、今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」
**5)**「きっと来るよ。」
**6)**「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」

次に、かえる君との掛け合いの会話における、がま君の発言を整理したい。

**a)**「いやだよ。」
**b)**「ぼく、もう、まっているのあきあきしたよ。」
**c)**「そんなこと、あるものかい。」
**d)**「ぼくに手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」
**e)**「ばからしいこと言うなよ。」
**f)**「今まで、だれもお手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」
**g)**「でも来やしないよ。」

このようにかえる君の発言は、次第次第に手紙に関する核心に迫る言語表現への移行が、一

方のがま君の発言は、段々と強く投げ遣りな口調への移行がそれぞれ認められる。

井上幸子は、かえるくんとがまくんの発言について、次のように述べている。**20)**

訳文のがまくんのせりふ「きやしない」は、「来る」の否定「来ない」を強めた言い方である。かえるくんのせりふ「きっと来るよ」は、がまくんの強い否定表現「きやしないよ」に対抗した肯定表現である。副詞「きっと」は、間違いなくそうだという意味であり、次に「だって／ぼくが／きみに／てがみ／だした／(ん)だもの」上記の決定的な一言がある。このせりふは、三拍の連続で発せられ三拍のリズムがたたきこまれている。かえるくんの語調をだんだん力強いものにして断言するのに極めて効果的である。

井上は、「がまくんのせりふ『きやしない』は、『来る』の否定『来ない』を強めた言い方である。かえるくんのせりふ『きっと来るよ』は、がまくんの強い否定表現『きやしないよ』に対抗した肯定表現である。」と文法的に説明している。

がま君の問いかけに対するかえる君の「だって、今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」という発言に焦点を当てたい。ここでは、「だって、今、ぼく、…」と読点が三カ所も使用されている。この「読点の間」は、かえる君の問いかけに対し、言い淀むかえる君の心底が如実に表現されている部面である。ここに、がま君に手紙を出したことを告白しようか、しまいかについて思い悩む「かえる君の逡巡」を見て取ることができよう。

元々、がま君に自分が手紙を出したことを伏せておきたかったかえる君にとっては、「だって、今、ぼく、手紙をまっているんだもの。」と発言することさえ、可成の抵抗があったと思われる。この場面において、慎重に言葉を選んで吟味するかえる君の姿が認められる。それでもかえる君は、「だって、ぼくがきみに手紙出したんだもの。」と発言し、自分自身が手紙を出したことをがま君に告白してしまうのである。慎重に言葉を選んで発言するかえる君を告白に踏み切らせたのは、がま君の「でも来やしないよ。」という発言にあると考える。

かえる君は、当初から悲しい思いのがま君を喜ばせたいと思っていた。一時自宅に帰りがま君への手紙を綴った後、手紙をわざわざかたつむり君に託して届けて貰うよう手配をしたり、がま君との遣り取りの中で、自分自身が手紙を書いたことをずっと秘密にし続けているかえる君の姿から、がま君を喜ばせたいと必死になって心を砕くかえる君の思いの強さを感じ取ることができる。しかしながら、憔悴し「もう来やしないよ。」と力なく発言するがま君の様子は、喜びとはほど遠い状況にある。手紙を書いたことを秘密にすることによって、がま君を驚かせて喜ばせたいと考えていたかえる君であったが、ここにきてがま君の様子を見て、それを秘密にすることが最善策ではないと考えたのあろう。

かえる君が、自分が手紙を出したことをがま君に告白する背景には、二つの判断が存在していると考える。すなわち一つは、このままの状態では、がま君の社会的孤立を更に悪化させてしまうという判断である。もう一つは、手紙を出したことを秘密にしたまま、がま君に手紙の到着を待たせようとする自分自身の行動が、却ってがま君を追い詰めてしまっているという判断である。かえる君が自分自身で手紙を出したことをがま君に告白した瞬間は、がま君の悲しみを真に理解し、「がま君の悲しみをかえる君が共有した瞬間」であると言えよう。

**【引用文献】**

１）『わたしたちの小学国語　２上』、日本書籍株式会社、平成 **8(1996)**年 **1** 月 **25** 日、**29～30**

頁
２）朝比奈昭元稿「『お手紙』の表現―キーワードに着目して―」「実践国語研究」、明治図書出版株式会社、平成 3(1991)年 10 月、152 頁
３）跡上史郎稿「『ない』ことにまつわる『ふしあわせ』と『しあわせ』―アーノルド・ローベル『お手紙』について―」、田中実･須貝千里編『文学の力×教材の力』、教育出版株式会社、平成 13(2001)年 3 月、59 頁
４）西郷竹彦著『文芸の教材ハンドブック１ アーノルド・ローベル・三木卓訳＝お手紙』、明治図書出版株式会社、昭和 60(1985)年、27 頁
５）永井たつ代稿「お手紙」、須田実編『文学教材の授業選集 1 童話教材①小学 1 年』、明治図書出版株式会社、昭和 61(1986)年、154 頁
６）前掲１）の文献、30～33 頁
７）前掲４）の文献、15 頁
８）橘優子・松川利幸稿「文学教材『お手紙』の教え方」、中西一弘編『子どもを生かす国語の教え方』、明治図書出版株式会社、昭和 59(1984)年、52 頁
９）吉田勉稿「小学二年お手紙」、「文芸教育」第 46 号、明治図書出版株式会社、昭和 60(1985)年、36 頁
10）前掲４）の文献、16 頁
11）前掲４）の文献、15 頁
12）前掲３）の文献、59 頁
13）高島晴美稿「二年『お手紙』の実践」、甲斐睦郎編『語句に着目した読み方指導一 小学校一・二年文学教材』、明治図書出版株式会社、平成 3(1991)年、83 頁
14）前掲１）の文献、33～34 頁
15）井上敏夫稿「お手紙を待つ」『国語教材の読み方読ませ方』、光村図書株式会社、昭和 59(1984)年 12 月、114 頁
16）斉藤美加稿「アーノルド･ローベル『ふたりはともだち』の文学性」『絵本が語りかけるもの』、松柏社、昭和 59(1984)年 5 月、159 頁
17）西郷竹彦著『意味を問う教育―文学教材をゆたかに、深く読む―』、明治図書出版株式会社、平成 15(2003)年、130 頁
18）甲斐睦郎稿「『お手紙』の表現―キーワードに着目して―」「実践国語研究」、明治図書出版株式会社、平成 3(1991)年 10 月、158～159 頁
19）前掲 18）に文献、160 頁
20）井上幸子稿「THE LETTER「お手紙」―英文と日本文の表現の特徴―」「実践国語研究別冊」第 110 号、明治図書出版株式会社、平成 3(1991)年、294 頁